

「国語」の出題の意図

国語の問題は、高等学校までに培った総合力を判定することを目的として、文科・理科を問わず、現代文・古文・漢文の三分野すべてから出題されます。選択式の設問では測りがたい国語の主体的な運用能力を測るため、解答はすべて記述式としています。なお、文科・理科それぞれの教育目標と、入学試験での配点・実施時間をふまえ、一部に文科のみを対象とした問いを設けています。

第一問は、現代文の論理的文章についての問題です。今回は小川さやかの記事を題材としました。タンザニアでの事例から、市場交換の裏面に人間的な共同性を育むための技術の存在を論じる内容を正確に捉える読解力と、それを簡潔に記述する表現力が試されます。また、ある程度の長文で、全体の論旨をふまえてまとめる表現力を問う問題も設けました。

第二問は、古文についての問題です。平安時代の『讃岐典侍日記(さぬきのすけにつき)』を題材としました。古文の基礎的な語彙・文法の理解をふまえ、寵愛を受けた天皇の崩御後、その子である新たな天皇に仕えることを命じられて思い悩む筆者の心情が文章に沿って理解できたかを問いました。文科ではさらに、話の鍵となる箇所や和歌の要旨を説明する問題も出題しました。

第三問は、漢文についての問題です。今回は清の方東樹の『書林揚解(しよりんようし)』を題材としました。漢文の基礎的な語彙・文法をふまえ、著述のありかたをめぐる筆者の考えと現状批判を文章に沿って理解できたかが問われます。文科ではさらに、対構造による比喩表現を説明する問題も出題しました。

第四問は、文科のみを対象とした、文学的内容をもつ文章についての問題です。今回は菅原百合絵の記事を題材としました。外国語・外国文学を学ぶことが、世界の見方を変えらるとともに、母語使用時には目を背けていた自分との出会いを促すという筆者の省察をとらえ、それを簡潔に表現できるかどうかを問いました。